

【平成23年10月 機動隊 男性警察官（22歳）】

「心に残る若者との出会い」

私は、平成23年9月10日から27日までの間、第24次連合機動隊員として、宮城県仙台東警察署への派遣を命ぜられました。任務は、被災者の方々が居住する仮設住宅への巡回連絡や被災地域におけるパトロール、突発事案への対応で、勤務は当番・非番の肉体的にも精神的にも過酷な勤務でした。朝7時に昼食と夕食を持って宿舎を出発し、8時30分に前日の当番員から取扱事項などの引継ぎを受け、その後パトカーに乗車して任務に当たるというもので、休憩場所は大型バスの車内、昼食は白米に一品のおかずが添えられた弁当、夕食は塩おむすび3個に漬物2切れといった質素なものでしたが、被災者の現状をみると、とても驚沢は言っていない状況でした。非番日には、朝8時30分に当日の当番員への事務引継ぎや県への報告等を行い、宿舎に戻るのは、午前11時ころで翌朝7時には宿舎を出発するという勤務の繰り返しでした。

被災地の状況は、仙台市内の内陸部は活気に溢れ、震災の影響は感じられませんでした。沿岸部はヘドロの臭いが立ち込め、骨組みだけになった家や高さ10メートルを超えるがれきの山が至る所にあり、車が傾いた家の屋根に載っているなど、それまでテレビで見ていた映像とは比べようのない、信じられない光景が広がり、強烈な衝撃を受けました。

9月25日には、台風15号が仙台市を直撃し、排水機能が失われた被災地では冠水が相次ぎ、沿岸部では水深2メートルに達した所もあり、とても「復興」云々等とは言えない状況にありました。しかしながら、そんな環境の中にあっても昼夜を問わず損壊した家屋の補修をしたり、自分の体よりも大きなかごを背負い、無数のゴミが散乱する畑の中でゴミ拾いをしている被災者の姿を見て、被災者の方々の震災に真っ向から立ち向かう強い意思を肌で感じました。また、パトロール活動中には、プレハブ小屋の脇で佇んでいた被災者の方など多くの方々が、私たちの姿を見て深々と一礼し、「ご苦労様です。」と労いの言葉を掛けてくれました。

パトカーを止めて電気部品店を営んでいた方に話を聞いてみると、「店を津波が直撃し、商品が全滅。何とか営業を再開させたものの、今度は台風による冠水で仕入れたばかりの商品がすべて水没してしまい、また、ゼロからのスタートになってしまった。」と話していましたが、そんな状況下でありながら、私たちには「わざわざ遠くから来てくれて、ありがとう。」と明るく声を掛けてくれたのです。そして、「震災で家屋が喪失したとはいえ、家が建っていた場所に戻ると、落ち着いた気持ちになれる。」という話もしておりました。私たちが「ひどい。」とか「復興は厳しい。」などと話していた場所が、被災者の方々にとっては、かけがえのない「ふるさと」であるということに気づかされました。

派遣期間中は、様々な人々に出会い、様々な悲しみやたくましさを学ぶことができま

したが、最も心に残っているのは、私と同年代の仮設住宅に一人で住んでいる男性との出会いでした。その男性とは派遣当日に、公園に建てられた仮設住宅を巡回連絡ときにはじめて会ったのですが、その男性は、長髪を茶色に染め、耳には大きなピアスをぶら下げ、腕には奇妙な模様のタトゥーを入れた若者で、一見して「今時のチャラチャラした異様な格好」であり、正直、戸惑いを感じ、一通りの話を聞き、早々に巡回連絡を終えようとしたとき、私に対し、唐突に「息子が警察官なんて、親も鼻高いでしょ。」「頑張れよ。」と声を掛けたのです。予想だにできなかった声を掛けられ、私は、嫌みを言われたような気になりながら、「ありがとう。」と言って、その住宅を引き上げたのです。

派遣の最終日ですが、何故か「その男性にもう一度会ってから帰りたい。」という思いになり、男性の部屋を訪ねたところ、男性は、見るからに眠そうな様子でしたが、「復興工事で一晩中働いている。」と言いながらも、私を快く部屋に迎え入れてくれたのです。部屋の中に案内され、挨拶を交わした後、同年代でもあり、今時のアイドルグループやお笑い番組の話などで会話が弾み、途中、何気なく家族のことについて触れたところ、男性は、急に寂しそうな表情を浮かべながら、震災で家族や多くの知人を失ってしまったことをまるで他人事のように淡々と話し始めたのです。

震災前は、爆音バイクを乗り回し、家にも寄りつかずプラプラと遊び回っていたこと。そして、家族を失った今になって、もっと家族との時間を大切にすれば良かったと心の底から後悔していること。自分は友達の家で遊んでいたため助かったが、もし、自分が家にいれば、家族を助けることができたのではないかと考えること。冷たくなった家族には「ごめんなさい。」という言葉しか出て来なかったこと。滅多に寄りつかなかった自分を「お帰り。」と言って温かく迎えてくれていた家族や自分の『帰る家』を失い、本当に死ぬことを考えたことなどを淡々と話してくれたのです。

悔やんでも悔やみ切れない彼の本当の心の叫びが聞こえてくるような気がしました。

彼が「息子が警察官なんて、親も鼻高いでしょ。」「がんばれよ。」と私に話した言葉は、決して茶化すものではなく、彼なりの自分自身への悔やみきれない後悔と家族への懺悔、そして私への励ましの言葉だったことを理解しました。そして彼は、ただうなずくばかりだった私に別れ際、握手を求め、「ありがとう。」と言ってくれたのです。私は、そんな彼に何もしてあげることではできませんでした。むしろ、私自身が、彼から同年代を生きる者の中に、深い悲しみを背負って、強く生きている者がいるという『大切なこと』を教えてもらったと思います。

震災後、半年を経過してからの特別派遣でしたが、被災者の方々はまだまだ深い悲しみの底にいるということをも身を持って体験し、当たり前のようにある家も、当たり前のようにある仕事も、当たり前のようにいる家族も、実は何もかもが当たり前のことではないことに気づかされました。私に今できることは、多くの被災者の方々や彼との出会いを忘れることなく、一人の警察官として、一人の人間として、何事にも感謝の気持ちを忘れずに、今後の業務に邁進していくことだと考えています。

彼の「ありがとう」も、彼自身の後悔と家族への懺悔、そして私への励ましだったと

思います。